

## 江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・親泊素子

## はじめに

ここ数年、二〇二〇年東京オリ  
ンピックに向けて日本の地域観光  
資源の多言語整備が急がれるよう  
になり、環境省でも数々の支援事  
業を展開してきている。また、鉄  
道等の民間でも積極的に多言語整  
備を進めている。しかし最近、大  
阪メトロの公式サイトでの自動翻訳  
機能で堺筋線をサカイ・マッスル・  
ライン、そして三両目をアイズ・

3と誤訳していることが分かりニ  
ユースになったが、あまり他人のこ  
とを笑ってはられない。国立公  
園内の標識にも似たような直訳や  
誤訳を見つけるからである。幸い  
環境省は「満喫プロジェクトステ  
ップアッププログラム二〇二〇」で  
国立公園の積極的な多言語解説整  
備事業を進めている。そこで今回

は「国立公園標識における多言語  
対応整備」について取り上げてみ  
たい。なお、詳細な内容については、  
国立公園研究所発行の『国立公園  
の標識―日本と海外―』（二〇一八）  
を参照していただきたい。

## 標識文言の心得

標識やサインは英語で *signage*  
と言われ、人々に情報を示すために  
つくられた視覚的な記号と定義さ  
れ、道や建物内外に設置して情報  
提供に利用される。国立公園の標  
識は環境への理解・判断・行動に  
関わる情報伝達手段として用いら  
れ、入口標識から安全性確保のた  
めの注意標識や公園の自然や景観  
について説明する解説標識までさ  
まざまな標識が存在する。しかし  
限られたスペース内に多言語を入  
れると文言の量が限られてくるた

めに、「見やすく分かりやすい」  
ピクトグラムがよく用いられる。  
ところが解説標識等では「内容を  
伝える」コミュニケーションスキ  
ルも必要とされるために文言の書  
き方に工夫が求められる。

## 1) 簡潔さと明瞭さ

アメリカの標識作成マニュアル  
には、まさに「俳句のような」と  
いう表現が用いられているほど、  
文言の簡潔性にはこだわりをもっ  
ている。また、ビジネスで顧客を  
引き付ける三三〇―三ルールを公  
園標識整備でも適用すると効果が  
あると言われている。ビジターが  
最初の三秒立ち止まったら彼らの  
関心をとらえたことになり、三〇  
秒立ち止まっていたらその情報は  
彼らの心をつかんだのである。さ  
らに三分いればよりそのトピック  
に興味をもったことが分かる。そ  
の考え方に基づいた文言作成が効  
果的であるとしている。特に瞬時  
に人の心をとらえる見出しは重要  
な働きをする。

## 2) 言葉の分かりやすさ

役所や研究者が用いる難しい用  
語は避け、一般の人が分かるような

言葉を使う。特に国立公園のよう  
な場所では動植物や地理、地形等、  
専門的な説明が出てくる場合が多  
いので正確な翻訳が求められる。  
動植物の学名は世界共通であるが、  
植物の一般英名等は複数の名前が  
存在したり、日本の固有植物の場  
合には英語の一般名がなかったりす  
るので、できれば環境省が指導的  
な立場でそれらの一般英名リストを  
作成してくれると翻訳者が不統一  
な訳語を使う問題がなくなる。

## 3) 文言の書き方と構成

英文標識の文言は、“to be”を省略  
して、“Swimming is not allowed”  
を“Swimming not allowed”と書い  
たり、“a, an, the”の冠詞を外し、  
“and”をコロンやセミコロンで代用  
したりするなど、より簡潔にまと  
めることを心がけている。また、本  
文の重要な部分については正確な  
内容を伝えるためにきちんとした  
文章の作成が求められる。見出し  
は意表をつくキヤッチコピーを考え、  
文言の導入部は数行の短い文で納  
め、最後は丁寧な説明でしめくく  
るといったレイアウトで、強弱、長  
短等のメリハリをつけた印象付け  
が大切である。



ダブルミーニングを使った標識

4) ユーモアのセンス

公園の注意、警告を促す標識には、「No Parking」や「No Smoking」といった否定的な文が使用されることが多い。しかし、禁止さればされるほどやってみたくなる「カリギュラ効果」という心理現象が人にはあるとされ、逆な効果を生んだりしている。そこでユーモアというスパイスを効かせた表現を使うことで前向きなメッセージを伝えることが可能となる。例えば、リスが木の实を食べる写真に「Parking for longer than 3 hours is nuts!」と書き、木の实と「ダメな奴」のダブルミーニングを用いたり、「After Whisky, Driving Risky」のような韻を踏む表現を用いたり、「Think Safety, Act Safety」のように同じ言葉を使

繰り返すことでリズムカルな表現になる。日本でもこういった知的センスで英文標識がつくられると外国人利用者も喜ぶであろう。

5) 情報と解説の違いを理解する

情報と解説の違いは What と Why の違いだとよく言われるが、情報は「これは何?」に対する情報提供であり、解説は「何故?」に対する答を提供するものである。従って、解説標識の書き方としては、その場所についての興味と好奇心を呼び起こすような問題提起をすることでビジターの関心を集めることができる。例えば始めの文言のところで、なぜここではこの規制や注意が必要かとか、ここでは今このような問題があるのですよといった問題提起をすると立ち止まってその先の解説を読みたくるのである。

フリーマン・ティルデンの原則と国立公園標識の心得

フリーマン・ティルデンの五つの原則を思い出して欲しい。この中で国立公園内の解説と言うのは単なる情報の伝達ではなく、不思議さと好奇心でビジターの胸を躍

らせるようにさせることであると述べている。ということは、解説する側が公園のことを熟知していなければこのような解説は難しい。そういう意味で国立公園の多言語解説にはその公園の自然・文化資源を熟知した地元の人々の参加が欠かせない。彼らが小さい時から慣れ親しんできた国立公園の貴重な資源を抽出してもらい、地元から発信してもらおうことである。さらに動植物や地理、地形、地質等の専門家にも参加をしてもらい必要がある。こういった人たちと翻訳者でチームをつくってより正しい多言語解説文を作成することが望まれるのである。従って、多言語解説整備の第一歩は正確な日本語解説から始まる。

おわりに

現在、国際観光資源の整備に向けて公園内の多言語解説整備が急がれているわけではあるが、その前に国立公園の標識整備の基本は、できるだけ人工物は目立たさず少なく、である。わが国の国立公園は「隠す」工夫より、「見せる」工夫に力をいれた標識が公園によ

つては見受けられる。これは国立公園というより観光地として発展してきた公園について特に言えることかもしれないが、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」で、国立公園の施設デザインの基本に立ち返り、数や大きさ、場所等の適正な整備を心がけるべきである。

最近、台湾の友人から日本にもう日本が存在しなくなったという失望のメールをいただいた。理由は案内所でもホテルのフロントでもどこに行っても中国人の通訳や中国語の看板があつて、日本を感じられなくなったというのである。利便性の整備に心を砕くあまり、不便な体験による旅のハプニングや冒険といった自己挑戦をする場がなくなり、旅の楽しみが半減したというこらしい。時として未知なる国で不自由な言語を使いながら予期せぬ親切やおもてなしに会うことも旅の醍醐味であることを忘れてはならないと思う。

親泊 素子 ● おやどまり もとこ

米ウイスコンシン大学大学院博士課程修了。国立公園協会研究センター長等を経て、一九九八年江戸川大学教授。二〇一七年から江戸川大学国立公園研究所客員教授。環境政治学専攻。